命を守る英語

点々

新型コロナウイルスとの闘いが続いている。「ウイルス」はvirusのラテン語読みで、英語ではヴァイラス。ウイルスと発音しても英語話者には通じないし、英語読みでヴァイラスと言われても意味が分からない日本人が多いだろう。ワクチン（vaccine）も似ている。これらの英単語は学校で習っただろうか？

手元にある研究社の新英和中辞典（１９９４年版）では、上記２語とも重要単語の印は付いていない。筆者が学生だったのは70～81年。やはり習わなかったのだと妙に得心しつつ、今はどうかと興味が湧く。同辞書の最新版（２００３年版）では、２語とも＊が一つ付され、大学レベルの語になっている。同辞書はその後改訂されていないので、ジーニアス英和辞典（大修館書店）も見た。01年版ではvirusは高校レベル、vaccineは大学・社会人レベル、最新の14年版でも同じである。

辞書における単語の重要度上昇は、社会の変化を反映しているのだろう。海外で日本語教師をしている長女によれば、「コーパス」という言語のデータベースを使うと、特定語の使用頻度や使用法が分かるそうだ。ある英語コーパスのサイトに登録し、virusを含む代表文例の出現回数を年別に見た。19年までの30年間の抽出総数を１００％とすると、平均的には各年約３％の登場頻度となるところ、04年が10％、12年24％、14年９％と大きく偏っている。

その頃、何が起きたのか。第一に新たな感染症の出現。03年に重症急性呼吸器症候群（ＳＡＲＳ）、09年には新型インフルエンザ、12年には中東呼吸器症候群（ＭＥＲＳ）が流行した。第二に、コンピューターウイルスの横行。サイバー攻撃の被害は右肩上がりで増えている印象だが、情報セキュリティー機関のＪＰＣＥＲＴによれば、サイバー事件の報告数は13年に２・９万件と過去最高を記録し、翌年以降は２万件前後である。感染症、サイバー攻撃とも、被害発生の都度予防・対処策が講じられるが、強力な新種が不定期に登場する点は似ている。

ところで、筆者は新婚旅行でフィジーを訪れた際、妻が食中毒になり現地の病院に行った。しかし、健康や命に関わる英単語が分からず苦労した。90年に米国勤務となった際は、地下鉄が緊急停止し、evacuate（全員降りて）と言われ困惑した。それから30年を経て、日本人が海外に行く機会は格段に増えている。国際会議の一部がリモート形式に移行するとしても、コロナ終息後に海外旅行・出張が回復するのは間違いない。

筆者は、英語教育の初期段階で、病気や脅威から「命を守る会話」を教えるべきだと考えてきた。本稿執筆を機に、現在の中学英語の教科書を見たところ、１年生用から体調悪化時の会話に１ページを割いている。ホテルや駅などでの会話も多く、海外訪問を想定した内容に進化している。virusやvaccineは出てこないが、今や英単語もスマートフォンで調べる時代。電子辞書の販売額が減って消費者物価指数の品目から外れる一方、スマホは常に若者の手元にある。海外で命を守る会話は、学校で基礎を習得した上で、必要な人がネットでサバイバル会話集を取得し、必要な場面で使えばよいのかもしれない。